

平成 29 年度 東京大学・企業・大学訪問を振り返って

この東京研修では、NPO 法人 Mission ARM Japan(MAJ)の近藤玄大氏による講演、グループセッション、四季株式会社訪問、仙台二高 OBOG 座談会、Fair Wind による東京大学キャンパス見学会が行われました。私は、自分の目標である米国大進学に関する情報を得るため、将来の夢である映画作りや興味のあることについての話を伺うため、そして日本人として東京大学についてよりよく知るために東京研修に参加しました。充実した 2 日間で、どの企画もとても参考になったのですが、特に印象に残った近藤玄大氏による講演、グループセッション、四季株式会社訪問の 3 つについて書かせていただきます。

最初は、NPO 法人 Mission ARM Japan(MAJ)の近藤玄大氏による講演についてです。近藤氏は 1986 年生まれの左利きで、幼少期を New York で育ち、神奈川県に帰ってからはバスケ、国際交流、学校行事、そして勉強に打ち込まれていました。東京大学進学後は、先生が面白い方だったため、この人になれば付いていけると思い、筋電義手について研究をし、大学院の修士課程では 1 年間 UC Berkeley にも留学していたそうです。修士終了後は、SONY (株) に就職し、2014 年からベンチャー企業 exiii (株) を設立、2015 年から Mission ARM Japan に移り、2016 年に SONY にも復帰しました。

近藤氏は、障害者とは環境によって生まれるもので、社会の一般と異なる人のことを言い、社会は右利きの人を中心に作られているので、左利きである自分も考え方によっては障害者だとおっしゃっていました。そのようなこともあり、義手作りに携わっているのかもしれないそうです。近藤氏曰く、ものづくりとは映画製作のようなもので、英語が話せない国に行っても、ものを見せるだけで伝えることができます。医療用に一般的な義手は約 150 万円しますが、3D プリンターを使って作ることで、4 万円で提供することができ、設計データを世界中に公開すること似寄り世界中で作られているそうです。

近藤氏は、博士課程にも進もうとも思ったそうですが、この延長線上で本物のような義手を作ることは難しいと考え、SONY に就職しました。しかし、研究者と被験者との間にも生産者と消費者の間にも壁があるので、それを壊すた

めに最初は趣味として（後にベンチャー企業として）、Panasonic の人と 3 人で 3D プリンターや Skype を活用して効率化しながら業務外の時間に義手を開発し始めました。最初はコンテスト受賞を目的に、アクセサリーのようにかっこよく、普通の手ではできない機能をつけ、安い義手を作っていました。James Dyson Award では世界中の参加者の中から 2 位を取り、160 万円の賞金とスポンサーを手に入れ、多くの人（両手のある人）からの支援金でまずは 2 人の協力者に義手を作りました。NPO の MAJ では、Google Impact Challenge でファイナリスト 10 組に残り、2500 万円の助成金を得ています。半田付けを看護師に教えたり、義手作りを製作者に実演してもらったりするなどの活動をしています。

これまでに近藤氏が作ってきた義手には、生まれつき右手のない歌手のためのコンサートのジェスチャー用のものがあります。また一般的な義手とは異なり、皿を置いたり力を加えやすい機能に特化した義手もあります。さらに、事故で腕をなくしてしまったペルー人の女性には、保険で 150 万円の義手を手に入れることが難しい中、2 か月で低価格の義手を提供したこともあったそうです。私たちに対するアドバイスとして、手と足と頭を動かして成功も失敗も経験すること、色々な人の考えや価値観に触れること、一緒に楽しく働くこと、喜んでもらえる仕事を選ぶこと、などの言葉をいただきました。

次は、林茉里子氏、若松常実氏、菅原伸夫氏とのグループセッションについてです。林茉里子氏は、中学生の時に参加したサマースクールで、イギリスにホームステイしたことがきっかけでイギリスの大学に興味を持ちました。高校 3 年生の時にイギリスの学校に編入し、サセックス大学に進学しました。イギリスには多様な人種が暮らしていることもあり、林氏は、社会について色々を知りたいと思い、社会人類学部に進学しました。しかし、イギリスでは日本人は外国人であり、差別的なことも含め、大変なことがたくさんあったそうです。例えば、病院で他の人よりもお金がかかる、仕事が見つかりにくいなどです。このようなこともあり、UCL の大学院で移民について学びました。NGO を立ち上げた後に、笹川平和財団で働くことになりました。イギリスの大学と日本の大学の違いを伺ったところ、イギリスは、大学に行くのが当たり前ではないので、大学に行くための学校に行く必要があります、日本から直接進学することはできません。そのため、大学に来る人は皆明確な目的を持っており、日本と比

べ、学部が3年、修士課程が1年と短いため、やることが多くとても大変だとおっしゃっていました。また、生活支援についての話を伺うと、支援する側とされる側の方に力の関係など本当はないのに、支援する側は見返りを求めようとします。大切なのは相手のニーズをきちんと知ること、教育についての支援をするときは、特によく調べてから支援をするそうです。しかし、アジアの国々にはイスラム教徒も多数いるため、ヨーロッパのようなキリスト教徒の国からは支援を受けたがらないなどの問題もあるそうです。

若松常実氏は、事前に質問した内容について教えてくださいました。建築を造る上で大切なことは、安全な建物を造ることです。高いところは風が強いので、超高層ビルは丈夫に造らなくてははいけません。しかし、日本は地震が多いので、柔らかくしなる構造も考えなければなりません。そのため、日本には300m以下のビルしかありません。ただ、日本の建築技術は世界トップクラスで、海外には500m以上の建物はたくさん建てているそうです。10年後には、東京駅の近くに390mのビルができるそうです。面白い建物については、法隆寺五重塔、正倉院、平等院鳳凰堂、東大寺大仏殿、松本城、錦帯橋、サクラダファミリアなどで、それぞれについて詳しく説明していただきました。超超高層ビルについては、計画はたくさんあるが実現するかは分からず、実現しそうなのはサウジアラビアのキングダムタワーなのだそうです。そして、キングダムタワーは、長く世界一を保つために高さの詳細は公表していません。これからの建築や都市は、地上高く、地中深く、海上海中へ、そして宇宙へ向かっていくだろうということでした。例えば、静止衛星都市を宇宙エレベーターで行き来するなどがあるそうです。

菅原伸夫氏は、大学生の頃、コロラド州立大学に1年間留学し、伊藤忠商事入社後は、ハーバード大学院で2年間留学し、ソ連に関する地域研究をしておられました。日本では、そのことについて全て学べる学問がなく、アメリカでは必須科目と自由科目があるだけで幅広く学べるため、総合力が身につきます。そうした総合力が身につくことを期待され、会社が学費から生活費まで出してくれたそうです。私は、映画製作についてお聞きしました。学部では演劇も含め文学的な内容を学ぶのですが、大学院では映画工学といったものも学べるそうです。留学することで、日本に足りないことがよく分かるとおっしゃっていて、特に携帯電話は世界に比べて日本はとても遅れているそうです。一方で、時計の正確さなどは日本の方が優れているそうです。

1日目の最後は四季株式会社(写真1、写真2)を訪問しました。劇団四季は、65年前に慶應義塾大学と東京大学の学生によって作られました。65年前の舞台というのは、主義・主張を訴える政治的なものだったのですが、舞台は文学の立体化であり、客を感動させ楽しませる場であると、舞台の世界に一石を投じました。

劇団四季の理念は3つあります。1つ目は、文化の東京一極集中の是正です。全国ツアーなどを通して、日本全国の子供達(や大人)にミュージカルを観る機会を与えています。他の劇団では全国ツアーと言っても東京と大阪、多くても名古屋までですが、劇団四季では北海道から沖縄まで開催されているそうです。2つ目は、演劇による経済的自立です。普通の劇団は有名な俳優がいて、その人をテレビや映画に出すことや、その人で客を集めることで、収入を得ていますが、劇団四季はほとんどチケットの売り上げのみで成り立っています。3つ目は演劇の社会生活への復権です。これは、最初に書いた通り、昔の舞台はエンターテインメントの世界から離れていたからです。劇団四季は約98%の俳優が劇団のみに所属していて、テレビに出るのも宣伝の時だけです。映画と舞台の違いについて聞いてみたところ、映画と舞台は結構違うもので、例えば、映画監督と舞台監督はよく似ていると思われがちですが、映画監督は舞台での演出家に当たるのに対して、舞台監督は演出家の下について指示伝えるなどして、円滑に進むようにします。また、劇団四季はロシアの演劇論も取り入れているそうです。生まれつき演劇の才能を持っていることも大事ですが、演劇論のような理論について知ること大事だとおっしゃっていました。

劇団四季の舞台はブロードウェイやロンドンの権利を買ってそのまま公演するレプリカ公演、一部の権利を買って、残りはオリジナルの公演、完全オリジナルの公演があります。曲を作る時は、作曲家に頼む場合と、劇団のメンバーが作る場合があります、作曲家の場合の方が多いが、音楽セクションのメンバーが少しはアレンジするそうです。脚本を作る時は、希望者で構成された文芸部が作ります。1人で作る場合もあれば、皆で意見を出し合って作る場合もあるそうです。今は、元のミュージカルを決めたら、脚本を作り、経営者が良いと思ったら、曲や演出家を決めて作っているそうです。そして、劇団四季は、これらのほとんどを劇団内だけで行い、外に頼む時も劇団出身者に頼むことが多いそうです。

次に、海外と日本の舞台の違いについて伺ったところ、ブロードウェイでは、

劇団が開催しているのではなく、ディズニーシアトリカルといったところが行っていて、契約しているユニオンのメンバーが舞台を作っているそうです。また、作っているプロセスが違って、劇団四季では、怪我などで休みが出たら、すぐに他の団員と交代するが、ブロードウェイでは、契約している人のみで期間中は行い、怪我などがあっても、数人のアンダースタディーと交代するだけだそうです。ホリプロは、このようなやり方でアメリカと近く、劇団四季は特殊なのだそうです。

近藤玄大氏の講義では、義手を安く、アクセサリのように個性として捉えられるものにしたところがすごいと思いました。ベンチャー企業を立ち上げ、世界に認められた行動力や発想を見習いたいと思いました。そして、留学によって海外にも友達ができて良かったと言っていたので、自分はアメリカの大学に進学し、海外にも生涯の友を作りたいと思いました。林茉莉子氏の話からは、NGO を立ち上げた行動力を見習おうと思いました。そして、アメリカにも多様な人種がいるので、相手の文化について知り、多様性を重んじることができるようになりたいと思いました。若松常実氏の話聞いて、日本中、世界中の面白い建築をもっと見に行きたいと思いました。菅原伸夫氏の話からは、自分はアメリカの大学に進学して、様々なことを学ぼうと思いました。そして、日本の直すべきところや誇るべきところをたくさん知ろうと思いました。四季株式会社への訪問では、劇団四季の理念を見習い、文化を尊重し、たくさんの人たちに自分にできることを提供しようと思いました。また、何にでもきちんとした覚悟を持って臨めるようになりたいと思いました。

OBOG との座談会や東京大学キャンパス見学会（写真3から写真5）では、よりいっそう自分の将来について考えることができました。また、東京大学についてよく知ることができ、なぜ自分は東京大学ではなく、アメリカの大学に進学したいのかよく考えることができました。この研修を通して、やっぱりアメリカの大学（アイビーリーグなど）に行きたいと改めて思いました。しかし、そのためには本当に努力しなければなりません。いつもそう思っていてまだできていませんが、自分の目標を叶えるために少しずつ、でも確実に努力していきたいです。



写真1 劇団四季芸術センター本館



写真2 劇団四季の厳しい世界



写真3 赤門



写真4 安田講堂



写真5 三四郎池